

天文学会運営検討に関する

懇談会記録

春季年会最終日にあたる5月24日、午後2時30分より約2時間半にわたり、天文学会運営検討に関する懇談会がひらかれた。いままでこの件については、学会としても主に特別会員を中心とした研究者層からの意見は折にふれ聴く機会があったが、今回の懇談会はたまたま学会主催の公開講演会にひきつづいて同じ会場で開かれた関係もあり、ふだん学会当業者と接触の機会がすくない通常会員も多数出席され、種々貴重な御意見をうかがうことができ、学会の今後のあり方を考えるうえでおおいに参考になった。以下は、その概略の記録である。なお、記録は座長をつとめた弓(緯度観測所)、大木(福島大学)の責任でまとめた。発言者名のあとの特・通はそれぞれ特別会員・通常会員の略である。出席者は60名ほどであった。

座長: 最初に理事長からの御挨拶をいただきます。

清水前理事長: ひと言御挨拶を申しあげます。昨年の臨時総会以後、天文学会では学会の組織と運営につきまして、委員会をもうけて検討してまいりましたが、このほどその中間答申をいただきましたので、これに答申として会員の皆様のお意見を直接拝聴し、今後の検討に役立てたいと考えております。活発な御討論と御意見をいただきたいと存じます。

座長: それではまず最初に運営検討委員会を代表して、小暮検討委員長にその御説明をお願い致します。

小暮委員長: —別項答申についての説明。省略—

座長: これから皆様方の御意見をいただきますわけですが、何しろこの答申の内容も多岐にわたっており、懇談会の会場のほうも5時までということと時間的な制約もございまして、座長のほうでつぎのように問題点を整理して、能率よくこの会を進行させていただきたいと存じます。御協力をお願い致します。

I 会員の構成について

II 学会組織と役員の出について

III 部会制について

IV 研連委との関連について

V その他、とくに今後の運営検討について

それではまず、Iについて御意見を賜りたいと存じます。

海野(特): 天文学という学問には一般の人も親密感をもっております。天文学会が、アマチュアと専門家が一体となって構成されているのもその趣旨から出たことであり、私もそれには賛成しております。しかし、逆にこの両者が一緒になってむづかしい面もあります。それまで、良い点を保持できるような、独立した別の制度も考えられるのではないだろうかと思えます。その案をだすださないが勝負でありまして、委員会案のA, B, C案はそれ以前の技術的なことのように思います。

関口(特): 答申案は私の考えに近いので安心しました。会員の種類についてのA, B, C案のうち、Bは実はアンケート回答に書いた私自身の提案ですので、説明させていただきたいと思えます。学会の欧文報告は読めない、読みたくないという人でも、研究者として認められる人もあります。それで、そういう人は、やはり権利・義務も段階をつけて区別した方がよいと考えたわけです。

畑中(特): いくつか委員会におうかがいしたいと思います。研究者とアマチュアを会員としてかかえていくという結論は、アンケートの結果がこうだったからと受動的にだされたものかどうか、第2に、学会運営への参加については、評議員選挙権にかかわるものと考えてよろしいか、最後に、準会員というものは、天文月報割引購読者であると解してよいのか、ついでに、「準会員」という言葉はあまり良くないと思うがどうか、以上の各点について委員会の見解をおきかせ下さい。

小暮委員長: 専門家とアマチュアを分けないという委員会の結論は、たしかにアンケートの結果に基礎はありますが、学会の伝統や、これを分けた場合に通常会員がどう

なるかなどの問題を考慮してきめたものであります。学会の運営への参加という言葉は、お説のとおり、評議員の選挙権というイメージであります。その意味で、会員というものは、運営に参加し得るものということであって、だから単に月報を読むだけの人は、会員と呼ばずに準会員と呼ぶことにしたのであります。

佐藤(通): 一体性を今後そのままつづけるかといっていますが、これまでだった研究者とアマチュアが一体となってきたかどうかを考えていただきたい。これまでも、アマチュアを足手まといにしてきたのではないかという印象をうけています。普及などは、ほとんどやってこなかったではありませんか。通常会員には、特別会員のように選挙権すらない、通常会員は、親切に入れてやっているといったものだと思います。ほんとうに一体性をいうならば、理事などにも通常会員の声を反映するだけの人数をいれたいと思います。

若松(特・検討委): 研究者とアマチュアが、一体の組織をもつという理由が、実はあまり明確にさせられなかったのであります。通常会員の運営参加についてはいろいろと面倒な問題があつて、今の検討委だけでは見通しを持ち得なかったのであります。それは、検討委の力不足であると同時に、学会そのものがもっている性格にも由来するものと思われま

関口(特): アマとプロが一体になったほうがよい積極的理由のひとつとして、裾野をひろげるという点があります。ここにおられる会員の中にも、アマチュアから研究者になられた方もいらっしゃいます。

座長: いろんな御議論もあろうかと思いますが、この問題はこのへんでまとめてみたいと存じます。答申の原案につきましては、大筋では反対意見なく、ほぼ賛成と思われま

ただ、佐藤さんの問題提起につきましては、運営検討委員会でも当然おとりあげになると思えますが、第IIのテーマとかかわってきますので、そこでまた討論していただくことにしましょう。それでは第IIのテーマに入ることにします。

小暮委員長: この問題については通常会員の声をぜひおきかせ願いたいと存じます。

畑中(特): 学会の諸機関の中に、ど

ここにひとつ公選で選ばれた機関がほしいと思います。ただ、答申をみると、評議員——理事長——理事というシステムはいまのままのようにみうけられます。このままでは、評議員会は、今までとかわらずに、座ったまま他人に命令し、大変な仕事は理事会に行くことになってしまいます。理事会は、評議員には命令され、若手からはつきあげられという損な役目になってしまう。そうではなく、チーフになるべき理事は、公選された評議員の中におかれるべきだと考えます。

古畑(特): 評議員の公選はたいへんけっこうなことだと思います。しかし、座ったまま他人に命令するというただ今のお話ですが、これは畑中さんとイメージがちがうのであって、たしかに、理事は実務的には大へんなのはやむを得ないと思いますが、評議員もまたたとえば将来計画推進のための機関を作るとか、学術会議会員選挙の候補者の推薦とか、研連委の推薦とかをやるので、座ってばかりいるのではないわけです。

畑中(特): 古畑先生の御意見に反対です。もっと大切なことがあるので激務には耐えられない、というよう

な人なら、最初から立候補しなければよいのだと思います。

小暮委員長: 公選するという原則は一致したと思います。そしてその人たちに積極的にうごいてもらうことになるでしょう。畑中さんの御意見のように、できればチーフになる人は兼任してもらうことも考えますが、実務がありますので枠ははめられないと思います。

座長: このテーマに関する御意見をしめくらせていただきます。公選という方向にはどなたも御異存ないものと判断いたしました。これを実現する方向で、今後どうするかの方針を検討していただきたいと考えます。ではつぎに、第Ⅲのテーマに入らせていただきます。

小暮委員長: 実は、この問題は検討委員会でも確信がなかったのでありまして、部会制がもし通ったらどうしようかと及び腰でアンケートをとったのであります。その結果は、研究者層の中には反対の比率が比較的大きく、その理由は現行でよい、部会制をとるとはんざつになるというのであります。これに対して通常会員の側からは、圧倒的多数の賛成者があつたのであります。これは、

活動の場がほしい、という希望であると受けとりました。そこで検討委としては、現状ですぐ部会制をしくのは無理であるが、何らかの形でアマチュアの会員活動を活発化する必要がある、そのためにはたとえば理事・評議員の中に担当者をおいて、部会制への橋渡しをしていって、ゆくゆくは実現するという方向でやっていったらよかろうということになりました。

佐藤(通): 時期尚早という結論にはガッカリ致しました。天文学会の活動分野として、研究・教育・同好の三つがあると思います。そしてこれらはみなちがう分野です。すくなくとも教育部会だけでもすぐにでも作っていただきたいと思います。

横尾(特): 教育大学に籍をおくもののひとりとして発言いたします。地学という分野は、自然科学のなかから物理・化学・生物がそれぞれ集り、残ったものがハジキ出された形で地学の中に掃き寄せられたものだと思います。しかも現状では、その中で地質関係が力を持っており、教育系大学の中でも、天文の方は学問的にも政治的にも力が不足しています。これを打開するには、マンパワーが

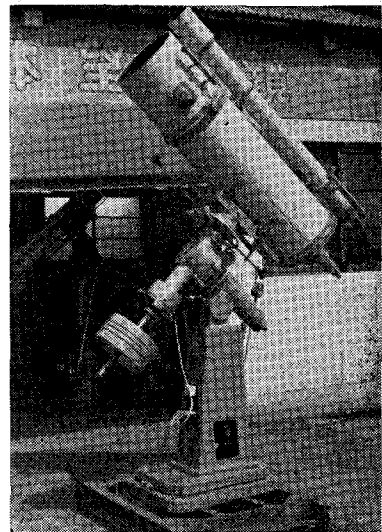
西村製の反射望遠鏡

- | | |
|----------|-------------------|
| 30cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 10cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/12) |
| 40cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 20cm 屈折望遠鏡 (f/12) |

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町27
電話 (771) 1570, (691) 9589

カタログ実費90円郵券同封



30 cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用

必要であって、いま、教育だけを分離するのは得策でないと思います。私はそれで、時機尚早論に賛成です。

木村(通): 佐藤さんの御意見に全く賛成です。さらに私としては、アマチュアの研究活動を助ける部会を早急に設置していただきたいと思えます。検討委で時期尚早といわれたが、その理由をもっと明確にお教え願えませんか?

小暮委員長: われわれに、確固たる見通しかなかったことが最大の原因であります。見通しさえあれば、すぐにでもやっつけましょう。検討委員会では、3つの部会をバラバラにとは考えておりません。3つを一体として考えたので、研究者部会が時期尚早であるので、他の2つもそうだとしたことになったわけです。

海野(特): 私の了解によれば、実は部会制は研究者の側からの要求として出て来たものだったと思えます。アンケートの結果は、意外といえませんが意外なものでした。しかしまだ時機尚早ということでは同感です。それは、アマチュアの側で、主体的な運動が不足していたと思えます。本当に部会をつくるには、そういう組織的な運動が必要でしょう。特別な委員会を作っては如何ですか? 同時に研究者の側にも、アマチュアの世話はカナワソといったエゴイズムがあるならば、反省しなければならぬと思えます。

畑中(特): 部会制をとらなくとも、担当評議員などを置いていけば良いと思えます。研究者が、普及活動をもっと援助していけということについていえば、これは困難なことです。研究者はエゴを捨てて反省しろといわれても、実際問題としてそれは不可能です。普及についていえば、むしろ専任の役員を雇うぐらいのことを考えたほうがよいと思えます。

横尾(特): 今まで天文をやってきた人たちの怠慢を責めたいという気持です。教育の面で、だれか研究会を作るべきです。現在、教育課程の再編成が進んでいるが、それは文部省ベースであって、民間団体としての天文学会でも、文部省側と別にそれをつくる必要があるのではないですか。

野村(特): 委員長に質問します。3つの部会については、各人に重複所属を許すのですか?

小暮委員長: かまいません。

座長: そろそろこのへんでまとめた

いと思えます。検討委の結論には、とくにアマチュアの方々に、強い不満があるとおききました。ただ、意見は分れてはいますが、裾野を広げていかなければならないという点では一致していると思えます。この点を出発点として、今後の検討を希望致します。それでは、第IVのテーマに話題をうつしましょう。

古畑(特): 学会・研連委双方から議論をもち寄って相談していくという原案のいき方に大賛成です。

海部(特): しかし、そうはいいながら、今のやり方はその精神に反しているじゃありませんか。研連の選挙資格を、天文学会に何の相談もなく「特別会員で……」ということを研連できめたのは、天文学会の主権の侵害です。両者もち寄って、ということを、研連は実行していません。この点について、学会側から嚴重に抗議する必要があります。

大谷(特・検討委): 天文学会だけから研連を選ぶということはやるべきではないと思えます。しかし、天文学会は、学術会議から、「しかるべき学・協会」として認められていて、そういう意味で学術会議に対して責任を負っていると考えべきであります。

海野(特): 学会と研連の関係は、ブラクティカルにはほとんど重複していて、学会員以外の人でどうしても入ってほしいというような人は、それほど多くはないと考えられます。だから、学会員から選んでも、それほどおかしくないと思えます。

竹内(特・検討委): 検討委のひとりではありますが、個人的な意見を述べさせていただきます。研連委と学会の関係論には、みんなにまだデータが不足していると思えます。研連委は、学会員に必要なデータを提供するべきだと思います。

座長: この問題についての討論をまとめます。研連と学会のあり方については、両者から意見をもち寄って話しあうことの必要性が認められました。双方から資料を持ち寄って、学会でクローズするべきかどうかということも含めて話しあうべきであるということだと理解いたしました。それではこの問題はここでうち切りまして、最後の、その他の項目に入ります。ここでは、今まで論じられなかったことを何でも含めて、自由に御発言願います。

木村(通): 検討委に御質問いたしま

す。検討委では、今後、通常会員を入れることをどう考えておられますか? また、各地でアマチュアの意見をきくことを考えられませんか?

小暮委員長: われわれの委員会は、本日をもって任期が終了し、新しい理事会でこれをどう続行されるかを検討していただくことになっております。それで、われわれは、理事会につきのとおり要望をだしました。

1. 検討を続行していただきたい。
2. 経過を総会で報告されるよう取計らわれない。
3. 次期検討委員を選出していただきたい。
4. その構成はつきのごとくが適当である。
支部から10名
通常会員から3名
理事会から若干名の助言者
5. 支部選出委員は支部ごとに投票、通常会員選出委員は理事長指名が適当であるとする。

末元新副理事長: 新理事会でこの問題をどう取扱うか、大体決まった線をお紹介します。先日の第一回理事会で、運営検討委員会を何らかの形で存続させることを決めました。新委員をどうするか、すなわち旧委員にひきつづきやっってもらるかそれとも入れかえるかについては、新理事だけでは決めかねますので、近日中に旧委員の皆さんと相談したいと思っています。

海野(特): 検討委員会は良くやったと思うが、しかしその結論としての答申は、きわめて常識的なものであります。誰がやってもこんなものに落着くでしょう。しかも、それを作るのに、学会の財政も大きく圧迫されているし、また、学問の進歩にブレーキをかけている面もあると思えます。再考を要するのではないのでしょうか。

竹内(特・検討委): 今、海野先生の言われたことは、事実ではありませんが、今それをここで述べられることは一定の効果がありますので、それを打消しておくことが必要でしょう。一人の人間が一晩でできるということと、選挙で選ばれた人が半年かかってやっていくということは、たとえその結論が同じものであっても全く別のことです。学問の面での圧迫ということについても、今、何人かのひとが学問的に圧迫されても検討しなければならないことが学

会の中にあるという事実認識こそが大切なのではないのでしょうか。

海老沢(通): 質問ですが、研究者とアマチュアという言葉は誤解をまねきやすいが、どういう定義で用いられるのかをおきかせ下さい。

小暮委員長: 言葉の上では、アマチュアとは天文学を趣味とし星に親しむという人であり、研究者とは天文学の研究を自分の仕事にしている人です。もちろんこの両者は厳密に区別はできませんが、大きくみて、この2つの山があることは事実だと思います。

海老沢(通): それならアマチュアという言葉は不相当であります。天文学のリサーチに参加している人はすべて広い意味で研究者と解してよろしいですか。

小暮委員長: 結構です。

海野(特): 天文教育のことについての横尾さんの発言について質問させ

ていただきますが、天文学教育は遅れており、それは今までやってきた人の責任であるといわれたけれど、それをこれからどうするかということはむづかしい問題です。横尾さんは、それを学会がイニシアチブをとってやれといわれるのですか?

横尾(特): 文部省の提供する教材のみでやってはいけないという意味で申しました。だれかがそれに批判を加えるとすれば、それは学会が最適ではないですか。

河鱒(特): 今後の検討委のあり方に要望したいのですが、やはりさきほど海野先生がいわれたように、検討委員は大へんです。たとえば私どもの所では、藤本君にやってもらっているけれど、その負担は大きくかかっています。何とか考慮していただきたいと思います。

座長: それではこの項目についてまとめます。今後、検討をつづけなけ

ればならぬということは、大勢であると判断いたしました。ただ、それが、学間をおろそかにしたり、財政を圧迫したりすることのないように、十分御配慮ねがいたいと思います。ちょうど時間にもなりました。まだまだ御意見もあるかと思いますが、それは今後再び発足するであろう検討委、あるいは理事会にどんどん反映させるようにしていただくことに致しまして、今日の懇談会を終えたいと思います。

清水前理事長: 活発な御討論、ありがとうございました。本日の議論は新理事会にも十分お伝えしていくように致します。

末元新副理事長: 今日はいにく、宮本新理事長が所用のため欠席いたしました。その点は私からもお約束して、責任をもって新しい理事会に反映いたすようにいたします。どうもありがとうございました。

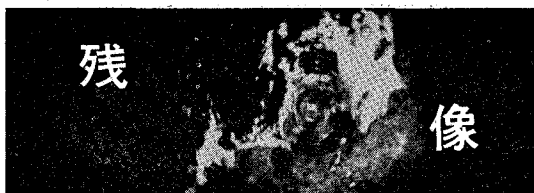
秋季年会について

1969年度秋季年会は、10月14日・15日・16日の3日間、仙台市で開かれることになった。詳細の発表と申込用紙は8月号に掲載される。なお講演申込みの締切りは8月末の予定。旅館リストは各支部理事のところにある、予約は各自のことになっている。

日本学術会議天文学研究連絡委員会委員の改選

第8期学術会議の発足にともなって、天文学研究連絡委員会(以下研連委と略称)委員の改選が行われた。すでに今年はじめ、若手を中心として多数の(118名)研究者から、「関連分野を含めて天文学関係研究者の総意が反映できるよう、研連委の選出方法を定められたい」との要望書が研連委員長に提出されていた。2月28日の研連委は、日本天文学会特別会員で博士の学位を有するものを有権者として、25名連記の互選を行な

うことなどを決めた。これに対して、研連委の決定は根拠が明確でない、研究者の定義を狭くしすぎる、また日本天文学会としても、研連委と学会との関係を一方的に規定し、学会員に差別を持ち込むことになるなどの抗議が出され、慎重に考慮されるよう理事長から研連委員長に申



し入れた(本号177頁などを参照)。また春季年会のさいにも、古畑学術会議会員の報告会の席上で激しい議論が関わされたが、結局そのまま選挙は行なわれた。この間、事務上のミス(投票用紙に番号をつけた、名簿の脱落など)のために投票用紙を配布しなোসというハプニング的一幕もあったが、若干の不備を残したまま、6月15日に郵送投票を締め切

り、開票の結果、以下の25名の方が得票順に当選された。得票数など詳しいことはまだ公表されていないが、かなりの数の白票・棄権があったようである。

青木信仰 赤羽賢司 飯島重孝
上野季夫 海野和三郎 大沢清輝
奥田豊三 河鱒公昭
小暮智一 古在由秀
斎藤国治 清水 彊
進士 晃 末元善三郎
高窪啓弥 高倉達雄
高瀬文志郎 田中春夫
林忠四郎 一柳寿一
広瀬秀雄 藤田良雄
古畑正秋 宮本正太郎 弓 滋
(敬称略、五十順)

昭和44年6月20日

印刷発行

定価 125 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内

印刷所 東京都文京区水道2-7-5

発行所 東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野45局(0422-45)1959

広瀬秀雄

啓文堂松本印刷

社団法人日本天文学会

振替口座東京 13595